

釜石市内の保育園の津波に対する 防災管理・防災教育と東日本大震災からの教訓

Nursery school safety for Tsunami disaster prevention including lessons from the Great East Japan Earthquake in Kamaishi city

○佐藤 健¹, 村山良之²
Takeshi SATO¹ and Yoshiyuki MURAYAMA²

¹ 東北大学災害科学国際研究所

International Research Institute of Disaster Science, Tohoku University

² 山形大学大学院教育実践研究科

Graduate School of Teacher Training, Yamagata University

In the Great East Japan Earthquake, serious human and material damage occurred by tsunami in nursery schools of the area along the shore. A hearing survey for the director of each nursery school was performed to clarify the actual situation and the lessons regarding the earthquake disaster with tsunami and the emergency response during the Great East Japan Earthquake. There were various situations of emergency response and human damage in each nursery school with depending on the geographical condition, the level of the disaster safety education, the preparedness of the disaster safety management, the cooperation with regional community, and so on. In this paper, several pregnant cases of the hearing survey in Kamaishi city are reported with the consideration.

Keywords : Kamaishi city, Nursery school safety, Disaster prevention, Great East Japan Earthquake

1. はじめに

2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震(M9.0)により、学校の児童生徒だけでなく、幼稚園や保育園の園児にも多数の犠牲者が発生した¹⁾。また、園舎の間借りや子どもたちの遠隔地への流出など、多くの課題を抱えた状態での再開を余儀なくされた幼稚園や保育園も少なくなかった。

そこで、多大な犠牲を払って得られた保育園における災害安全に関する震災教訓を後世に伝えるとともに、首都直下地震や東海・東南海・南海地震等をはじめとした今後発生が想定されている広域巨大災害に対する保育園の防災管理、防災教育に活かすことを目的に、宮城県内、および岩手県内のいくつかの幼稚園・保育園を対象にヒアリング調査を実施した。本調査の詳細については、文献2を参照願いたい。

本報告では、ヒアリング調査対象の中から、特に釜石市内の保育園2園に着目し、震災発生当日の実際の避難行動を報告するとともに、震災以前の避難計画や避難訓練、震災後の防災管理の強化等について整理し、保育園

における災害安全の充実に向けた教訓を述べる。

2. 方法

調査対象の保育園の管理職に対して、東北地方太平洋沖地震と津波による被害や震災対応、東日本大震災以前における保育園の安全計画や防災教育の実践状況、震災経験を踏まえた今後の課題などについて、訪問によるヒアリング調査を実施した。調査時期は、2012年2月である。

ヒアリングの調査項目は統一せず、保育園ごとに被害の状況や地域性が異なることから、園長または担当教職員に自由に話して頂き、必要に応じて筆者が質疑を行った。

3. 結果と考察

各保育園で運用されていた避難計画と東日本大震災で実際にとった緊急対応行動との関係について、調査結果の概要を紹介し、考察を述べる。

表1 調査対象校の被害概況と学校概要

保育園名	園舎の被害		死亡・ 行方不明	避難所の 開設期間	園舎の間借	標高 (m)
	振動被害	浸水被害				
釜石市内のA保育園	無	有(2階)	有(2名)	無	有	3
釜石市内のB保育園	無	有(1階)	有(2名)	無	有	3

(注記)

- ・ 表中の死亡・行方不明者は、管理下外(当日欠席、下校後、保護者への引き渡し後等)における人的被害である。
- ・ 各保育園敷地の標高は、Google Map 標高^{*1}を用いて測位した。測位方法の詳細は補注による。

*1 http://wisteriahill.sakura.ne.jp/GMAP_II/GMAP_ALTITUDE_II/index.php

a. 釜石市内のA保育園

A 保育園の地理的条件と津波による浸水範囲（図中のシャドウ部分）を図1に示す。図中の○印がA 保育園の立地位置を示す。園舎は津波で浸水し、解体となった。地震発生時の園児は76人、先生は20人だった。緊急避難、避難生活・引き渡し、保育園の再開、避難訓練について、ヒアリング調査結果の概要を示す。

【緊急避難】

A 保育園のすぐ隣に消防本部があり、大津波警報の音声流れていた。地震の後、津波がすぐ来ると事務局長が想起した。昼寝中の子どもは起こして、パジャマの上にジャンパーなど上着を着せ、靴を履かせることがやっとなかった。乳母車3台、あとは職員がおんぶやだっこをして、とにかく薬師公園に避難した。最終的に薬師公園に避難してきた人は1,000人ぐらいだったが、薬師公園への到着は一般の人たちよりも早い方だった。後で確認した映像から、15:06（地震発生から20分後）には薬師公園に到着していたことが確認できた。薬師公園では、円の中心にいる教員を子どもたちが囲み、子どもたちの外側を教員がさらに囲む態勢をとった。子どもたちを安心させることと、寒さをしのぐことにもなった。

避難途中の避難路は、その時は避難者で混雑している感じではなかった。地域の人による乳母車の補助などの支援があった。旧国道を横切るときに、車を無理矢理とめて渡った。薬師公園の中腹から移動する時に津波がまちなかまで襲来した。人や車が流されているようすを見た子どもが何人かいたことになる。

事務局長が若い職員2~3人と一緒にA 保育園に戻り、玄関で毛布をまとめた所に、遠くの方から津波がやってきた。高台の薬師公園に全員が無事に避難した。その後、直線で200m程度の距離にあった釜石のぞみ病院（9階建て）に移動した。そこでは病室に一般市民と一緒に子どもたちも避難していた。

【避難生活・引き渡し】

釜石のぞみ病院の入院患者に移動してもらった後で、避難者を受け入れてくれた。保育園の子どもは3歳未満と3歳以上で2室に分けて5階と6階の病室にそれぞれ収容した。事務局長はのぞみ病院の5階のベランダから外（海の方角）を見ていた。重油に火がついて河口を照らすと津波がよく見えた。夜12時頃に襲来した第4波目が一番高かったと事務局長が記憶している。

地震発生から3日目に脱水症状を起こした子どもがいたが、避難先が病院だったので適切な対応ができた。3日目に0歳の子どもを県立病院に搬送した。釜石のぞみ病院は指定避難所ではないので備蓄があるわけでもなかったが、暖かいだけで良かった。

釜石のぞみ病院に移動した次の日、病院が準備したおにぎりなどを食べることができた。釜石のぞみ病院までおにぎりを持ってきてくれた父兄がいた。電気、水道がないので、トイレが汚れてどうしようもなかった。

父兄が子どもを迎えに来て抱き合っただけで喜んでる親子を見て、我慢している子どももいた。口には出せないが全員の父兄が迎えに来てくれるのか園長として正直不安だったものの、3日目の夜に最後のお迎えがあり全員を引き渡すことができた。4日目の朝9:00に保育園を解散した。

【保育園の再開】

旧釜石南幼稚園が地震のあった3月に閉園することが決まっており、園舎を3年間無償で借用することができたので4月1日に再開することができた。ピアノや遊具

などもそのまま使用することができた。

A 保育園がもとあった場所は4mの津波が襲来していて、再建復興基本計画によると条件付き建物の制限を受けており、同じ場所での再建はできない。

【避難訓練】

社会福祉施設では、月に1回の避難訓練を実施することになっている。年間12回の避難訓練では、地震・火災・津波・不審者など多様な想定を行っている。A 保育園では津波を想定した避難訓練を年に2~3回実施していた。避難先は薬師公園や、釜石小学校、園舎の2階など、さまざまな取り組みを実施していた。

「津波てんでんこ」は素晴らしい考えであり、小学生ぐらいならば、てんでに逃げることをたたき込むことが重要であり、むしろ子どもの訓練よりも先生方の訓練の方が重要だとも思っていると事務局長が述べている。内陸に位置する再開場所（旧釜石南幼稚園）でも避難訓練を実施している。

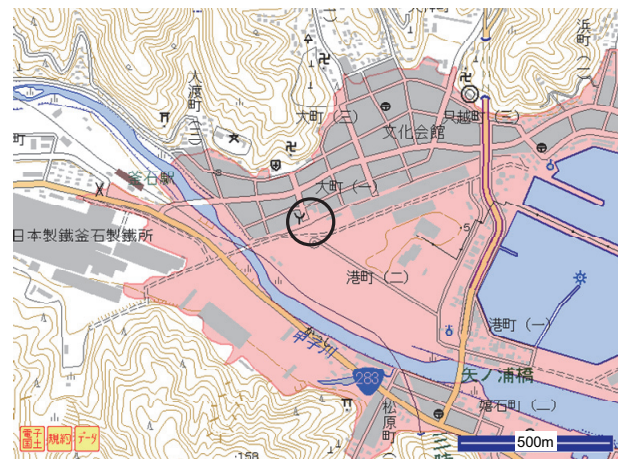


図1 釜石市内のA 保育園の地理的条件と浸水範囲

b. 釜石市内のB保育園

B 保育園の地理的条件と津波による浸水範囲（図中のシャドウ部分）を図2に示す。図中の○印がB 保育園の立地位置を示す。すぐに停電となりテレビからの情報が得られなかった。園舎は津波で流失した。園舎のみならず職員の名分を証明するものが津波で流出したため、身分証明に苦労した。

緊急避難、避難生活・引き渡し、連絡手段、保育園の再開、避難訓練、震災教訓について、ヒアリング調査結果の概要を示す。

【緊急避難】

地震発生時の14:46は子どもたちは昼寝の時間帯だった。年長児は起きていたのでテーブルの下に入った。在籍園児は87名であったが、感染症が流行しており、休みの子どもや早退する子どもが多かったため、地震発生時は72名が保育園にいた。地震発生当日に勤務していた職員数は21人だった。トイレに行ったりする子どももいたが、クラス毎に園庭に集合した。未満児の人数が多かったため、大きい子どものクラスの職員を小さい子どものクラスの応援に行かせた。園庭で人数が確認できたクラスから指定避難場所である「山崎デイサービス」へ向けて避難を開始した。「山崎デイサービス」への避難は、震災以前からの避難訓練通りの動きである。

隣接する児童館の先生2人が学童の子どもたちがまだ来ていない時間帯だったので、避難の援助をしてくれた。「山崎デイサービス」に全員無事に到着した。その

途中、お年寄りが子どもたちのいつもの散歩と同じような見守りの目で見ていた。「山崎デイサービス」には、後から合流する釜石東中学校の生徒や鶴住居小学校の児童よりも先にB保育園が到着した。

「山崎デイサービス」で振り返ると、もやか煙のようなものが海の方に見えた。「ここも危ない」さらに高台に避難する必要があると感じ、「恋の峠」を目指して二次避難を開始した。小中学生も「山崎デイサービス」からの移動を開始した。その途中で釜石東中学校の先生が手助けしてくれた。生徒も子どもの手を引いてくれた。「恋の峠」の石材店に到着した小中学生の中には、泣いたり、過呼吸の子どももいた。高台から海の方を見たら何もなくなっていた。

子どもたちを真ん中において、防寒シートや近所の方が持ってきた毛布を使って暖をとった。石材店のプレハブ事務所の中に保育園児を入れてもらうようお願いしていたが、濡れかかった人や水に濡れた人が石材店に後から運ばれてきて、同所に避難していたクリニックのドクターによる診療がそこで始まった。

16:30に消防署職員から釜石小学校へ行って下さいとの指示があった。高台を通る三陸道には津波のために行き場を失った自動車が停まっていた。遠野の造園会社の車や消防車、父兄の車などに子どもと職員が便乗し、釜石小学校に送ってもらった。「保育園」、「山崎デイサービス」、「恋の峠」の「仲野石材店」それぞれの場で引き渡しを実施した子どもがいた。

【避難生活・引き渡し】

釜石小学校に到着した園児31人と保育士はそのまま釜石小学校に宿泊した。釜石小学校の校長先生の配慮で2階の教室を1部屋、B保育園のために午後7時過ぎに専用に開放して頂いた。最初の晩の食べ物は、近所から差し入れされたカブのつけものだけだった。幼児5名と職員9名が乗った車が間違えて釜石小学校でなく旧一中体育館に行ってしまったが、医師住宅の畳の部屋を使用できた。翌日、釜石小学校に合流した。石油ストーブを2か所に置いてもらって寒さをしのぐことができた。子どもたちは横になれたが、職員は座ったまま過ごした。

徐々に父兄が釜石小学校に迎えに来た。3月14日の午前中までに全員迎えに来てもらうことができた。最後まで5~6人の先生が残っていた。被災した職員が避難所として残り、しばらくは園児の安否確認の場ともなった。

釜石小学校に避難している間、子どもたちはぐずったり、泣いたり、わめいたりしなかった。子どもたちに職員がピタッと寄り添う安心感もあったと思うと園長が振り返っている。何日かぶりで母子再会の場面では双方泣いたが、それまでは子どもたちは気丈にしていた。

【連絡手段】

保育園の携帯電話に保護者のメールを全員分登録していたことがとても役だった。引き渡した後でも、所在や子どもの動静把握のための連絡ができた。

【保育園の再開】

3月24日に同法人の他の保育園で子どもの受け入れを開始した。保護者世帯の65世帯のうち50世帯が被災し、保護者さんたちが動かないといけないので、受け入れを希望する人はそちらで受け入れた。B保育園は栗林町にある「さんあいセンター」という地域の集会所を借りて、4月13日から再開した。

【避難訓練】

B保育園では震災以前から毎月避難訓練を実施している。年に1回、津波を想定した避難訓練では実際に「山

崎デイサービス」へ行っている。訓練では、園庭から「山崎デイサービス」まで12分40秒で到着することを確認していた。3月3日の昭和三陸津波の記念日には市民対象の防災訓練が行われている。B保育園としては、津波に関する絵本や紙芝居を子どもたちに聞かせることはあるが、津波だけを特に取り立てて、ゲストスピーカーに話をしてもらおうようなことはしていなかった。また、隣接する児童館の子どもたちと保育園とが一緒になった避難訓練は1回しかしていない。時間帯が違うので都合が合わない。

再開先である「さんあいセンター」に来てからも、月に1回の避難訓練を実施している。内陸に位置しているため津波の到達は考えにくいですが、津波を想定した訓練も実施している。避難場所に決めた神社まで園から3分間で避難することができた。ここでの避難計画がどうなっているのかを問い合わせる新入園児の保護者もいた。

B保育園は、震災以前は鶴住居小学校や釜石東中学校との津波防災に関する連携は特にしていなかったが、釜石市教育研究所研究発表大会(2011年1月7日開催)において、小中学校の防災教育の取り組みの報告を聞かせてもらったところだった。

【震災教訓】

B保育園では、当日休んでいた子どもが1人亡くなった。また、いったん父親に引き渡したものの、その上の子どもを幼稚園に迎えに行つて津波で亡くなった。釜石市では、待機児童が多いため、兄弟で保育園に入ることができず、上の子どもが幼稚園に通っていた。「仲野石材店」で引き渡した後、自宅に戻ろうとし、津波を見て慌てて高台に戻ってきて助かった保護者もいた。

再開後は正規職員6人、臨時5人で運営している。2011年7月に系列の他の法人に移動した職員にも集まってもらい、午前中に卒園式を行い、引き続いて午後を検証の話し合いを行った。その場で上がった話としては、「これまでとにかく保護者へ引き渡せばいいと思っていたが、保護者に危機感がなければ結局子どもの命を守りきれない。」ということであった。

入園の時に保護者に対して園の理念を通常説明するが、加えて安全のことについても説明を加えることを園長として考えている。ただし、保護者会を開こうとしても、住んでいるところが仮設住宅だったり、遠方だったり、通常のように集まってもらうようなことが極めて難しい状況がある。クラスに1つ非常持ち出し袋を地震の前から準備していたが、震災の後も再点検して備え続けている。避難訓練の時もそれを持って避難している。

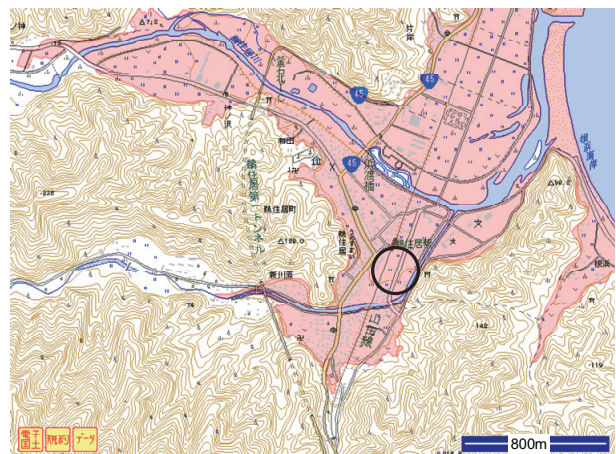


図2 釜石市内のB保育園の地理的条件と浸水範囲

4. おわりに

本報告で紹介した事例を通して得られた保育園の主に防災管理に関する教訓を以下に示す。

- 児童福祉施設としての保育園では、月に1回の避難訓練を実施することが児童福祉法に基づく「児童福祉施設の設備及び運営に関する基準」で定められている。一方で、保育園と同年齢の子どもが通園する幼稚園は、学校教育法に基づく教育施設となるため、安全に関する法的規制は学校保健安全法が適用されるため、保育園ほどの避難訓練の頻度は要求されない。幼稚園と保育園との機能を併せ持つ認定こども園の設置が可能となっている時代背景にも鑑み、保育園の防災管理の水準に近づけるような幼稚園における防災管理の強化の必要性が考えられた。
- 自然災害発生時、保育園の管理者として、保護者へ子どもを引き渡せば責任を果たしたという単純な問題ではなく、保護者や子どもの家族にも危機感がなければ結局子どもの命を守りきれないという教訓を得た。B 保育園の園長が考えているように、保育園における避難や引き渡しを含む安全計画について、保護者や子どもの家族の理解を事前に得ておくことが子どもと保護者の命をまもるために極めて重要となることが考えられた。
- 自然災害からまもるべき子どもの命は、災害安全に関して所掌する省庁が厚生労働省か文部科学省かは関係ないはずである。近隣に立地する保育園、幼稚園、小学校などは、公立か私立にも関わらず相互の防災管理について積極的に情報共有や課題の解決に向けた協働を推進すべきであることが考えられた。

謝辞

ヒアリング調査の実施にあたっては、公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンの協力を得た。また、ヒアリング調査に多大な理解と協力を頂いた A 保育園、および B 保育園の関係の皆様深く感謝申し上げます。

補注

標高の数値は、測量機などを用いた高精度の数値に対して一定の誤差を含んだものであり、一つの参考値である。まず、園地内の測位数は単数ではなく、保育園ごとに園庭の四隅や中央部の他、敷地境界線外の道路上など複数とした。実際の園庭地面は平坦であるため、真の標高数値は一つであるが、Google Map 標高を用いる場合は、測位位置により取得標高の数値がばらつくことがある。著者による現地調査の際の園地周辺の地形の状況確認に基づいて、複数測位した数値の中から取得標高のばらつきの要因をできるだけ排除した数値を表1に記載した。

参考文献

- 1) 文部科学省：東日本大震災による被害情報について(第 208 報)，平成 24 年 9 月 14 日(最終閲覧日：2014 年 9 月 17 日)
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/other/detail/_icsFiles/afieldfile/2012/10/30/135089_091410_1.pdf
- 2) 日本安全教育学会(代表編集)：東日本大震災における学校の被害と対応に関するヒアリング調査記録集(増補第四版)，平成 26 年 3 月